熊本大学六十年史

通史編

殷本大學中庸

通史編

題字　神野　雄二

熊本大学　事務局本館

戦後まもない頃の熊本市内中心部空撮写真

熊本大学の前身となる熊本医科大学、第五高等学校、熊本工業専門学校、熊本薬学専門学校、熊本師範学校、熊本青年師範学校は、熊本市街、あるいは市街からほど近い場所に位置していた。

これらのキャンパスは新制国立大学が発足するにあたって熊本大学に引き継がれることになったが、現在は熊本大学の所有地ではなくなっているところもある。

この空中写真は、国土地理院長の承認を得て、米軍撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号　平 25 情複、第 667 号）

旧第五高等学校本館（五高記念館）

旧熊本工業専門学校機械実験工場
（工学部研究資料館）

旧熊本師範学校男子部講堂（教育学部附属学校給食センター）

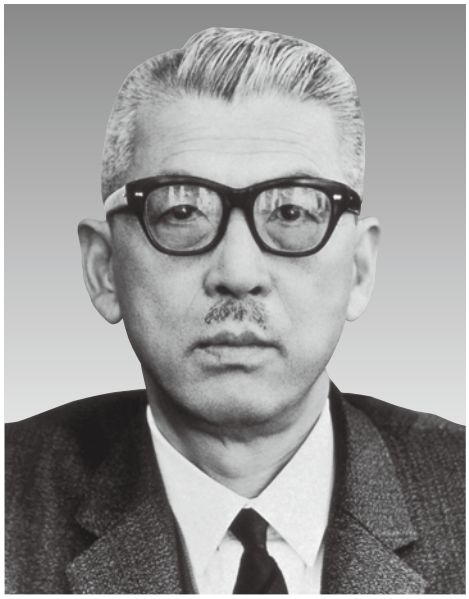
宮本記念館

旧熊本医科大学山崎記念図書館（医学部山崎記念館）

初代学長　鰐淵健之（1949-59年）

第２代学長　本田弘人（1959-65年）

歴代学長



第３代学長　柳本　武（1965-69年）

第４代学長　六反田藤吉（1969-70年）

第５代学長　黒田正巳（1970-74年）

第６代学長　岳中典男（1974-80年）

第７代学長　松山公一（1980-86年）

第８代学長　松角康彦（1986-90年）

第９代学長　森野能昌（1990-96年）

第10代学長　江口吾朗（1996-2002年）

第11代学長　﨑元達郎（2002-09年）

第12代学長　谷口　功（2009年-現在）

揺籃期

開学記念式典◇1949年

熊本大学設置認可申請書◇1949年

開学記念式典◇1949年

熊本大水害後　研究室からの泥土排出◇1953年

開学５周年記念式典◇1954年

黒髪北キャンパス　教養教育教室
◇1950年代

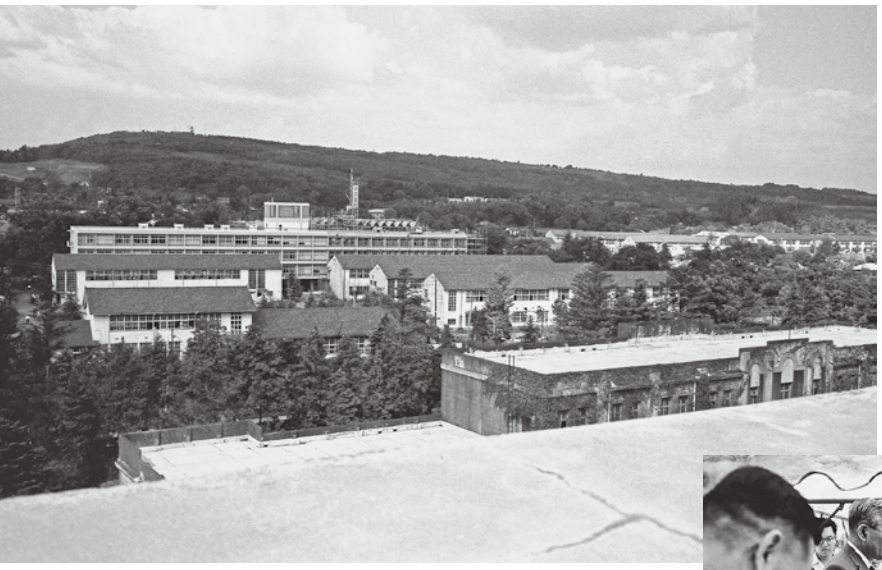
昭和天皇・皇后両陛下行幸啓（黒髪キャンパス）
◇1960年

開学10周年記念式典◇1959年

拡充期

昭和天皇・皇后両陛下行幸啓
（理学部附属臨海実験所）◇1966年

第１回全学教職員園遊会◇1961年



黒髪北キャンパスの整備◇1966年頃

池田勇人総理歓迎第五高等学校同窓会◇1964年

皇太子・皇太子妃行幸啓◇1968年

大学紛争　スト解除派のバリケード撤去に伴う学生衝突◇1969年

工学部　創立80周年記念祭◇1977年

本荘キャンパスの様子◇1980年頃

『熊本大学30年史』◇1979年

創立30周年記念式典◇1979年

転換期

細川護熙熊本県知事来学◇1985年

薬学部百周年記念ホール開所式◇1985年

医学部創立百周年記念式典◇1996年

教養部解散式◇1997年

法学部創立20周年記念シンポジウム◇1999年

医学部保健学科設置記念式典◇2003年

国立大学法人発足に伴う役員辞令交付式◇2004年

国立大学法人熊本大学発足式◇2004年

法曹養成研究科設置記念式典◇2004年

法人化以後

熊本大学新ロゴのバナー掲示（上通商店街）
◇2006年

熊本大学上海フォーラム◇2005年

芦北町と国立大学法人熊本大学との連携に関する
協定調印式◇2006年

熊本大学支援者会設立総会◇2007年

第五高等学校開校120周年記念式典◇2007年

環黄海産学官連携総（学）長フォーラム　歓迎昼食会
◇2007年

熊本大学設立60周年記念式典◇2009年

熊本大学設立60周年記念祝賀会
◇2009年

熊本大学東京連合同窓会設立記念式典◇2008年

熊薬創立125周年記念祝賀会◇2010年

熊本大学　コミュニケーションワード

2013年3月に、本学が社会に提供する根源的特質を象徴的に伝える言葉として、コミュニケーションワード「創造する森　挑戦する炎」を策定。

揮毫は、かつて本学に在籍された漫画家・井上雄彦氏によるもの。

発刊のことば

熊本大学長　谷口　功

本学は255余年前に設立された再春館と蕃滋園に源を発し、また、熊本大学の母体となる第五高等学校から125余年と我が国において最も長い歴史を持つ大学としての輝く伝統を誇っています。1949年、戦後の学制改革によって熊本市に所在していた第五高等学校、熊本医科大学、熊本薬学専門学校、熊本師範学校、熊本青年師範学校、熊本工業専門学校など旧制の諸学校が統合され、新しい制度の国立大学として新制熊本大学が誕生しました。2009年にはこの新制大学設立から60周年を迎え、様々な記念式典や事業を執り行いました。

この通史編は、記念事業の一つである60年史編纂事業の中で、先に刊行された写真集および部局史編と合わせた三部作のまとめとして刊行されたもので、新制熊本大学の60年の変遷が見事に再現されています。学内外の数多くの関係者の協力によって執筆され、３年半以上の歳月をかけて編纂されたものです。懐かしい出来事やそれらを基盤として発展してきた様子が鮮明に蘇るとともに、未来への展望にも言及されています。

周知の通り、新制熊本大学の設立当初は、法文・教育・理・医・薬・工の６学部と附属図書館、医学部附属病院、体質医学研究所からなり、当時の大学の規模は、学生の入学定員が1,070名、教員と職員を合わせた定員は1,484名でした。今日では、文・教育・法・理・医・薬・工の７学部のほか、８つの大学院研究科等、13の研究所・センター、さらに医学部附属病院を有し、学生総数は１万名を超え、教職員数約2,000名からなる中核的な総合大学に発展しています。この間、本学は10万人を遥かに超える有為な人材を社会に送り出してきました。大学としての変遷や発展の様子を通史編の中に見いだしていただければ幸いです。

今日の国立大学改革に対する真剣な議論を踏まえ、また、今後の社会の変化や将来を見据えながら、この通史編に示された本学の様々な活動を基盤として、本学の将来の在り方を考えたいと思います。これからも本学の社会的使命である教育（人材育成）、研究（知の創造）、社会貢献（人材や知の創造に基づく社会的な還元や国際貢献）に邁進することで、国立大学としての本学の役割を果たしつつ、次の60年、100年への一層の飛躍を期したいと思います。

結びに、この通史編の編纂に際して、多大の時間を割いて執筆いただいた学内外の執筆者や協力者の方々ならびに編纂にご尽力いただいた編纂委員はじめ、この数年にわたって三部作の編纂にご尽力いただいた60年史編纂室の皆様に心から感謝の意を表し、通史編巻頭の言葉とします。

発刊のことば

本　編

第１編　文教の地・熊本の歴史と風土

第１章　第五高等学校 …… 3
第１節　第五高等中学校 …… 3
1　高等中学校の設置と森有礼の視察
2　第五高等中学校設立
第２節　第五高等学校と教育制度の変遷 …… 6
1　1894（明治27）年の高等学校令
2　1919（大正８）年の高等学校令
第３節　龍南会 …… 8
1　設立
2　龍南会雑誌
3　龍南会の行事
第４節　習学寮 …… 10
1　創設から1914（大正３）年まで
2　1915（大正４）年から1945（昭和20）年まで
3　各部の活動
第５節　戦時の第五高等学校 …… 14
1　戦時の影響
2　龍南学徒報国団
3　勤労動員・学校工場
4　学徒出陣
第６節　戦後から閉校まで …… 18
第２章　熊本師範学校 …… 20
第１節　新町時代（1874年５月～1877年２月） …… 20
第２節　籔の内時代（1878年５月～1893年６月） …… 21
第３節　京町時代（1893年６月～1951年３月） …… 23
第４節　女子師範学校（1911年４月～1943年３月） …… 26
第５節　第二師範学校（1914年４月～1931年３月） …… 29

第６節　第一・第二師範合併（1931年４月）…… 30
第７節　官立熊本師範学校（1943年４月～1951年３月）…… 31
第３章　熊本青年師範学校 …… 37
第１節　発足と教育制度拡充期 …… 37
第２節　戦時下の学校―養成所から師範学校へ …… 41
1　熊本県立青年学校教員養成所から熊本青年師範学校へ
2　戦時下の学生たち
第３節　戦後の教育改革と学校 …… 44
第４章　熊本医科大学 …… 48
第１節　前史 …… 48
第２節　私立熊本医学校時代 …… 51
1　県立熊本病院の再建と私立熊本医学校の創設
2　私立熊本医学校の発展
第３節　私立熊本医学専門学校時代 …… 53
第４節　県立熊本医科大学時代 …… 55
1　熊本医学専門学校の県立移管及び熊本医科大学への昇格
2　熊本医科大学予科
3　熊本医科大学の２度にわたる紛擾と山崎正董の学長就任
第５節　官立熊本医科大学時代 …… 58
1　熊本医科大学の官立移管と山崎学長時代
2　戦時下の熊本医科大学
3　熊本医科大学臨時附属医学専門部
4　熊本医科大学附属体質医学研究所
5　南方特別留学生
6　終戦直後の時代と熊本医科大学の終焉
第６節　熊本医科大学からみた文教の地・熊本の歴史と風土 …… 64
第５章　熊本薬学専門学校 …… 66
第１節　はじめに …… 66
第２節　復陽洞 …… 66
第３節　再春館 …… 66
第４節　蕃滋園 …… 67
第５節　再春館の閉鎖と古城治療所 …… 67
第６節　私立熊本薬学校 …… 68
1　私立熊本薬学校の教則及び教科書
2　私立熊本薬学校校長の氏名、在任期間、略歴
3　私立熊本薬学校の卒業生数
第７節　私立九州薬学校 …… 70
第８節　九州薬学専門学校 …… 71
第９節　九州薬学専門学校の官立移管 …… 73
第10節　熊本薬学専門学校の充実 …… 76

第６章　熊本工業専門学校 …… 80
第１節　第五高等学校工学部 …… 80
1　高等学校と専門学科
2　工学部設置
3　工学部独立問題
第２節　熊本高等工業学校 …… 82
1　実業専門学校
2　熊本高等工業学校設立
3　学科、附属施設の拡充
4　校友会・工友寮
5　戦時の熊本高等工業学校
第３節　熊本工業専門学校 …… 90
1　改編と勤労動員
2　戦後の熊本工業専門学校

第 2 編　熊本大学の誕生

第１章　熊本大学創設への歩み …… 95
第１節　前身諸学校の戦後処理 …… 95
第２節　大学設立計画と文部省の高等教育機関設置方針 …… 99
1　新制大学設置に向けた制度設計
2　総合大学設置案の萌芽
3　南九州総合大学誘致活動の展開
4　熊本教育大学の構想
5　薬学系単科大学の構想
第３節　熊本大学の創設と前身諸学校の廃止 …… 119
1　熊本総合大学設置運動
2　熊本大学の設置認可
3　新制熊本大学の出発と旧制諸学校の終幕
第４節　熊本総合大学期成会の諸活動 …… 140
1　熊本総合大学期成会の発足
2　募金活動の展開
3　期成会から振興会へ
第２章　発足期の熊本大学 …… 152
第１節　大学機構の整備 …… 152
1　運営組織の成立と規則の制定
2　発足時のキャンパス状況
3　各学部の研究・教育の状況
第２節　「６・26水害」とその被害 …… 175

1　「6・26水害」の概要
2　熊本大学の被災状況
第3節　キャンパスの再編成 …… 187
1　教養教育施設の充実
2　国策による国際交流
3　専門研究課程の設置
4　キャンパスの再編成
第4節　附属研究・教育機関の設置 …… 197
1　体質医学研究所
2　医学部附属病院
3　医学部附属諸学校
4　合津臨海実験所
5　教育学部附属校園・農場
6　附属図書館の新設

第3編　熊本大学の成長

第1章　高度経済成長下の熊本大学 …… 211
第1節　大学像の変容と教育・研究施設の充実 …… 211
1　高度経済成長と熊本大学
2　一般教育のあり方の検討と教養部の創設
第2節　水俣病研究の本格化と進展 …… 230
1　水俣病の公式発見と医学部における研究班設置
2　有機水銀中毒説への道のり
3　胎児性水俣病
4　高度経済成長期を背景とした医学部附属中毒研究施設設置
5　「第三水俣病」報道の余波
6　人文・社会科学分野からの水俣病問題への取り組み
7　その後の熊本大学と水俣病研究が残したもの
第2章　大学紛争下の熊本大学 …… 246
第1節　熊本大学紛争 …… 246
1　大学紛争の背景
2　学生運動の拡大と紛争の発端
3　熊本大学紛争の本格化
第2節　紛争の余波 …… 255
第3章　紛争とその後の変化 …… 259
第1節　改革への模索 …… 259
1　熊本大学改革準備会の設置
2　熊本大学改革委員会の活動

第２節　学内情勢の諸変化 …… 263
1　教職員の模索
2　管理運営体制の改編
3　学生の模索―学生自治組織の崩壊と再建
第４章　科学の発展と組織の拡充 …… 274
第１節　教養部の教育改革 …… 274
第２節　情報化の時代へ …… 282
第３節　医療技術短期大学部の創設 …… 286
1　医学部附属学校の再編・統合
2　医療技術短期大学部
第４節　法文学部の分離独立 …… 292

第４編　大学の「多角化」と熊本大学

第１章　急激な社会変動の中の熊本大学 …… 303
第１節　新たな大学像の模索 …… 303
第２節　新理念に基づく教育研究組織の改組 …… 308
1　学生気質の変化
2　教育研究組織の改組
第３節　開かれた大学を目指して …… 336
1　授業の開放
2　国際交流
3　企業等との連携
第２章　キャンパス移転計画の浮上と消滅 …… 365
第１節　キャンパス移転計画の背景 …… 365
1　熊本県のテクノポリス構想と熊本大学のキャンパス移転
2　移転と再開発との間で
第２節　移転計画の社会問題化 …… 379
第３節　現地再開発方針の決定 …… 380

第５編　大学設置基準の大綱化と熊本大学

第１章　大学のあり方の再検討 …… 385
第１節　1990年代の高等教育政策 …… 385
第２節　大学改革の実行 …… 390
1　熊本大学教育研究体制検討委員会の発足
2　新学部構想の展開と教養部の廃止
3　大学院の新設・整備

4　学術振興政策に伴う多様な学内共同教育研究施設等の設置
5　自己評価・点検の開始
第３節　各キャンパスにおける施設長期計画の策定 …… 421
第２章　大学運営の変化 …… 430
第１節　運営機構の見直し …… 430
1　運営組織の見直し
2　学長選考方法及び委員会組織等の見直し
3　学部・研究科管理運営組織の見直し
第２節　教職員定員の削減と事務一元化の実施 …… 438
第３節　大学情報の公開 …… 441

第 6 編　国立大学法人化と熊本大学

第１章　国立大学法人熊本大学の誕生 …… 449
第１節　法人化への胎動 …… 449
1　国立大学法人化の政策動向
2　法人化に向けた大学戦略の検討
3　熊本大学の法人制度設計
4　中期計画の策定
第２節　国立大学法人発足記念式典 …… 481
第３節　法人化後の大学運営組織 …… 484
1　組織及び管理運営体系
2　人事・労務制度
3　財務・会計制度
4　目標・評価の導入
第２章　法人化を見据えた教育・研究組織の構築 …… 501
第１節　教育・研究組織改編の進展 …… 501
第２節　各学部における学科再編成 …… 503
第３節　各研究科の再編成 …… 505
第４節　新研究科設置 …… 508
1　社会文化科学研究科博士課程
2　法科大学院（法曹養成研究科）の設置
第５節　医学部保健学科の発足 …… 510
第６節　高度情報通信社会への対応 …… 512
1　熊本大学情報化委員会の設置
2　「総合情報環」構想の策定
第７節　eラーニング教育の推進 …… 520
1　全国初のeラーニング大学院設置
2　eラーニング推進機構の設置

第３章　戦略的な諸施策の展開 …… 527
第１節　「連携」の時代へ …… 527
1　地域連携・国際連携の展開
2　国際交流
3　同窓会と大学支援
第２節　ユニバーシティ・アイデンティティの構築 …… 545
1　「熊大ブランド」の確立を目指して
2　ユニバーシティ・ミュージアムプランの策定
第４章　熊本大学60周年記念事業 …… 558

第 7 編　熊本大学の現在と将来展望

第１章　法人化後の現状と課題 …… 565
第１節　教育改革 …… 565
1　教育改革大綱2013について
2　教育改革について
3　全学教育改革の一環として
4　国際化の推進
第２節　研究環境、支援の改善 …… 569
1　世界の拠点となる組織・施設の充実と問題点
2　全学共同教育研究組織の再編
3　研究成果の動向とその課題
4　研究支援体制とその問題点
5　研究環境における課題
6　イノベーション推進機構を中心とした産学官連携活動の全学（全分野）展開による社会貢献の拡大
7　大学としての社会貢献事業推進体制確立の重要性
第３節　附属図書館 …… 573
1　総合情報環構想2010について
2　図書館改修とラーニング・コモンズ新設について
3　図書館の情報化について
第４節　熊本大学医学部附属病院の現状と課題、将来展望 …… 575
1　熊本大学医学部附属病院の現状と課題
2　熊本大学医学部附属病院の将来構想
第５節　アドミッション・ポリシーと入学者選抜の改善 …… 578
1　アドミッション・ポリシー
2　入学者選抜方法の改善
3　高大連携・接続
第６節　キャンパス整備 …… 580

第７節　新執行部による大学運営 …… 582
1　谷口功熊本大学長の就任と執行部の編成
2　大学運営の体制
3　大学運営の取り組み
第８節　業務運営の改善及び効率化 …… 585
第９節　人材の多様化 …… 587
1　新しい人事制度の導入
2　複線型人事制度
3　採用制度と人材育成制度
4　今後の展開
第10節　男女共同参画 …… 589
1　取り組みの背景
2　本学における初期の取り組み
3　九州初の「女性研究者モデル育成事業」採択
4　第二期の取り組み
5　体制の強化と活動の成果
第２章　熊本大学の将来像 …… 591
第１節　第三期中期目標計画に向けて …… 591
1　今日の社会的な動向と本学の将来への基本的な考え方
2　第二期中期目標期間から第三期中期目標期間に向けての組織的な課題と方向性
3　「憧れの熊本大学」の実現へ
第２節　教育体系の整備充実 …… 594
第３節　先端的・基盤的研究の推進 …… 594
1　研究拠点大学としての環境整備
2　知の拠点としての先端研究
3　研究拠点大学としての組織運営体制の整備
4　全学体制の組織の整備
第４節　社会貢献の推進 …… 596
1　本学の社会的役割―創造する森、挑戦する炎
2　同窓会等との連携拠点の整備
第５節　国際化推進拠点大学を目指して …… 597

特　論

特論 1 熊本大学における教養教育

第１節　教養教育運営組織の60年 …… 601
　1　教養部の設置から廃止までの機構の変化
　2　教養部の事務部創設から解体までの過程と現在の教養教育事務体制
　3　教養部教職員数の変化
　4　教養教育関連委員会の60年間の変化
第２節　大学発足時における教養教育 …… 616
　1　戦後発足時における大学の教養教育
　2　教養課程の運営
　3　厚生補導特別企画合宿研修
第３節　教養部設置までの歩み …… 617
第４節　教養部設置後の動向 …… 618
　1　教養部発足時の組織・運営
　2　教養部における教育・研究活動
第５節　カリキュラムの変遷と特徴 …… 620
　1　発足時の教養教育の目標の設定
　2　新カリキュラムへ向けての経過
　3　総合科目
　4　「くさび型教育方式」
　5　一般教育の新カリキュラムをめぐって
　6　新カリキュラムの基本性格と構成
第６節　教養部と大学紛争 …… 633
　1　学園紛争
　2　学園紛争後の教養部自治会問題
第７節　教養部の廃止と大学教育センターの設置 …… 636
　1　「くさび型教育方式」への批判と一般教育組織の改編
　2　教養部の廃止に至る組織改革の経緯

特論 2 熊本大学の組織変遷

第１節　発足～1961（昭和36）年３月まで …… 639
第２節　1961（昭和36）年４月～1981（昭和56）年３月まで …… 648

第３節　1981（昭和56）年４月～1996（平成８）年３月まで …… 663
第４節　1996（平成８）年４月～2004（平成16）年３月まで …… 675
第５節　2004（平成16）年４月～現在まで …… 688

特論 3 熊本大学と国際社会

第１節　国際交流の歩みと体制の整備 …… 711
　1　初期の取り組み
　2　国際交流に対応した組織と環境の整備
第２節　大学の国際化推進と国際交流の発展 …… 714
　1　交流協定の拡充と留学生受け入れ及び日本人学生の海外派遣の活発化
　2　さまざまな国際連携の推進、国際共同教育プログラム及び国際共同研究の展開
　3　国際化推進機構及び国際化推進センターの設置
　4　国際的な大学環境の整備と国際化推進の加速化
第３節　グローバルなアカデミック・ハブを目指して …… 730

特論 4 熊本大学と地域社会

第１節　はじめに …… 734
第２節　地域貢献 …… 735
第３節　生涯学習 …… 740
第４節　産学官連携 …… 743
第５節　寄附講座 …… 748
第６節　学内文化財の公開等 …… 749

特論 5 入学者選抜試験の変遷

第１節　入学試験制度の変化と熊本大学 …… 752
　1　発足期の入学試験
　2　新テストの模索
　3　進学率の急上昇と国立大学共通テスト構想の展開
　4　共通一次試験の実施と実施後の動向
　5　大学入試センター試験の開始と入試の多様化
第２節　数値から見る熊本大学の入学選抜試験 …… 772
第３節　おわりに …… 786

特論 6 熊本大学の文化遺産

第１節　建造物 …… 788
1　旧第五高等中学校本館・化学実験場・表門
2　旧熊本高等工業学校機械実験工場
3　旧熊本高等工業学校本館
4　旧熊本高等工業学校標本館
5　旧熊本医科大学山崎記念図書館
第２節　植物園 …… 796
第３節　貴重資料 …… 798
第４節　埋蔵文化財 …… 800

図・表・写真一覧 …… 803

役職者一覧（法人化以降） …… 812

熊本大学60年史編纂関連規則 …… 832

熊本大学60年史　通史編　執筆者 …… 835
熊本大学60年史編纂委員会 …… 837
熊本大学60年史　通史編　専門委員会 …… 839
熊本大学60年史編纂室 …… 839

編集後記

凡　例

1．本書は、熊本大学60年史編纂委員会が編纂する『熊本大学60年史』全３巻（通史編、部局史編、写真集）のうちの通史編である。

1．通史編は、本編（１～７編）及び６つの特論で構成する。特論とは、本編に組み込むよりも独立して60年史を通覧できるかたちで論じた方が良いと判断したテーマについて、別途特論として項目を立てたものである。なお、特論として項目立てを行ったテーマについて、本編でも取り扱う必要があると判断した場合は、本編中においても適宜取り上げた。

1．通史編では、本編第１編から第６編までは原則として本学が60周年を迎えた2009年度末（2010年３月31日）までの熊本大学の歴史について記述した。第７編及び特論については刊行時の状況及び将来構想についても記述した。

1．本来は、本学の学生に関する事柄についても取り上げるべきであるが、60年史編纂過程で集めた資料上の制約や編集方針の都合により、本書では学生に関する事柄は取り上げないこととし、60年史別編として刊行する。

1．通史編は、熊本大学60年史編纂委員会において決定した編集方針に基づき担当者が執筆し、通史編専門委員会において原稿の確認作業を行った。

1．本文の記述に際しては、原則として常用漢字、現代仮名づかいを用いた。ただし、人名などの固有名詞や仮名表記では意味を取りにくいものについては、この限りでない。

1．資料の引用にあたっては、原則として常用漢字を用いたが、仮名づかい、送り仮名、人名は原文によった。

1．法令の日付及び法令による諸組織・施設の設置・改組・廃止の日付については、原則として法令交付日に基づくよう努めた。ただし、組織の設置・改廃等の年月日について法令と実態とが異なっている場合は、各執筆者の解釈・行論に委ねた。

1．年代の表記は西暦を主とし、適宜和暦を（　　）内に補った。

1．使用した図・表・写真については、巻末に一覧及び掲載ページを記した。